

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2) 2019 年度第 1 回・通算第 1 回研究会

日時：2019（令和元）年 7 月 13 日（土）13:00-17:00

場所：マルチメディア会議室(304)

報告者：児倉徳和（AA 研）

今回の研究会では、研究課題の開始にあたり、代表者である児倉からの趣旨説明と、本研究課題で対象とする「アルタイ型」という言語類型をどのように規定するかについての報告があった。

(1) 児倉徳和（AA 研）「趣旨説明」

本研究課題の趣旨説明として、本研究課題で検討する項目として以下のものを提示した。

①文の述部の構造に関する類型—名詞的な節の脱従属化 (insubordination) と動詞の定性 (finiteness) の問題：各言語における動詞の定性 (finiteness) と通時的現象としての名詞的な節の脱従属化 (insubordination) の過程。

②節の階層と主語の管理：主節における主語人称の標示や人称モダリティによる主語人称の指定、同一主語・異主語の標識やヴォイスによって行われる複数の節の間での主語（の同一性）の管理。

③節の階層とテンスの管理：従属節における相対テンスなど、従属節のテンスの主節のテンスによる管理のあり方。

④節の階層と名詞句の意味・統語的機能：文・節の内部で機能する主語と、文の単位を超えて機能する主題について、主題や名詞句の定性を標示する要素の有無、およびそのような要素の成立過程、情報構造にかかわる名詞句の語順の転換や省略、主語および目的語を中心とした名詞句の格標示、分裂文など有標の情報構造の文形式と名詞句の定性の標示の関連。

(2) 風間伸次郎（AA 研共同研究員，東京外国語大学）「アルタイ型言語の特徴なのか？、アルタイ諸言語の特徴なのか？、地域特徴なのか？ —証拠性・人称要素・否定などを取り上げて—」

本発表では、「アルタイ型」言語の特徴である SOV、修飾語—被修飾語という語順（主要部後置）と、他の形態統語的特徴、具体的には主要部内在型関係節、接尾辞優勢の形態構造、動詞複合体、証拠性や認識モダリティの文法化、膠着的形態構造、との間に関連があるか否かについて、WALS (World Atlas of Language Structures) のデータに基づいて検討がなされた。さらに、「アルタイ型」言語の直接話法と間接話法について発表者のデータに基づいて検討が行われた。

本発表では結論として、SOV、修飾語—被修飾語という語順が関係節の構造、接尾辞優勢の形態構造の間に相関関係があること、接尾辞優勢の形態構造をもつと接頭辞優勢の形態構造をもつ言語では動詞複合体の構造が異なり、前者がヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティ・人称という客

観的要素—主観的要素という承接順をとるのに対し、後者では主語と目的語両方の人称を表示するなど、文の構造を凝縮した構造をとること、性 (gender)の文法範疇が非「アルタイ型」の言語に偏ってみられること、「アルタイ型」の言語において直接話法と間接話法の境界があいまいであり、しばしば一つの文が両方に解釈される、ということ述べた。

本発表については、共同研究員が専門とする言語に「アルタイ型」のものが多数を占めており、それらの言語ではやはり接尾辞が優勢ではあるものの、一部には接頭辞を伴う場合もあることが共同研究員の間での討論により明らかになった。そして、接尾辞型構造にみられる要素の承節順と接頭辞型構造にみられる要素の承節順が鏡像をなすか否か、なさないとすればなぜか、という問題に関心が寄せられた。

その他、研究会では研究課題の今後の遂行の計画についても話し合われた。

以 上

(文責・児倉徳和)